

# 本調査による心理面・予防行動への介入効果

- 自分の普段の生活が性病に対していかに非予防的かを感じた。
- 何となく「HIVなんて自分には無関係」と思っていたが、このアンケートで、「HIVには気をつけよう」と思った。
- アンケートに答えながら、アナルセックスではコンドームをつける意識があるが、オーラルセックスに関してはコンドームをつける気が全くないことに気がついた。
- セーフアセックスを心がけないと、いつ感染してもおかしくないんだなと感じた。
- アンケートに答えてB型肝炎も性感染症だと知った。抗原陽性ならば相手への感染があるのか？気になってきたので調べてみます。
- HIVの検査を受けたほうがいいかもしれないと思った。
- アンケートに答えてみて一番感じたのは、性感染症の知識が自分の中に全然なかったことです。今後、自分やこれから出会う人のためにしっかりした知識を得ていこうと思います。
- 自分の不勉強さと業の深さを再認識したアンケートでした。
- 自分のしていることについて見直せる良い機会だと思いました。
- 自分がやっていることを客観的につきつけられるような気がした。
- 自分を振り返るよい機会になった。
- 改めて自分のことが少しわかった気がした。
- アンケートに答えてみて、僕自身を客観的に見ることでできたような気がする。
- 回答しているうちに、気づいていなかった自分が見えたような気がした。
- 言葉にすると、自分の知らない自分が見えてきたり見えなかったりで・・・面白かった。
- 普段ゲイに関するアンケートに答える機会がないので、自分の内面を振り返るいい時間となった。
- ゲイという性のあり方について振り返った。
- 改めてゲイとして生きることを意識させられた。
- 世の中にはゲイだということでネガティブになったり死にたいと思う人もいるのかと改めて気づき、自分の恵まれた環境に感謝した。
- このアンケートに参加できて、何かの役にたてられたことで充実感を感じる。
- 匿名でも自分の思いを表出し、研究材料とは言え耳を傾けてくれる人がいると思うのはとても気持ちのいいことでした。
- こうしてアンケートで振り返ると、生きにくい世の中で、ああ、自分って結構頑張っているのかも、と思った。

調査そのものに予防的な介入効果あるいは内省を自然に促すような効果があった人も多くみられました。大きく分けると、①性生活に関する振り返り、②ゲイ・バイセクシュアル男性としての生き方に関する振り返り、③実際に研究に参加した意味の実感ということになるかと思います。

まず①の性生活については、「自分の日頃のセックスを反省した」「いつ感染してもおかしくないのだと思った」と自分自身のこれまでを振り返ることで認知の変化が起き、「これからはしっかり知識を得ておきたい」「検査を受けておいた方がよいかもしれない」と、今後の予防について考え始め、「気になってきたので調べてみます」というような、行動をスタートするという変化が起きる段階まで、各人なりの段階に応じて一歩を進めることができたということだと思います。本調査は今後のHIV予防介入のプランを立てるための基礎情報の収集や実態把握という目的で行われたものでしたが、そのような研究実施者の意図以上に、一部の参加者にとっては研究に参加すること自体に予防介入的な意味合いがあったことを示唆していると考えられます。これは、ひいては援助職が彼らの性行動について共に振り返る機会や場を提供することが、本人の予防に対する認知、動機づけ、更には行動の変化までを促進するという、予防介入の可能性が示されたとも言えるのではないのでしょうか。

②のゲイ・バイセクシュアル男性としての生き方については、「気づかなかった自分が見えたような気がした」「あらためてゲイとして生きることを意識させられた」というように、自分自身を振り返ったという意見や、「自分の環境に感謝した」というように、自分自身だけでなく周囲・環境をあらためて振り返り見直したという意見がありました。これらの意見からは、対人援助職がゲイ・バイセクシュアル男性の性行動だけを切り取って介入を考えるのではなく、そのライフスタイル全体に対する関心を持ちつつ関わる必要性があることが示唆されていると思います。

そして③としては、実際に研究に参加して「何かの役に立てたことで充実感を感じる」というように、研究実施者や自分の仲間の役に立ったという充実感を感じたというものや、調査を終えてゲイとしての自己の存在を尊重されたように感じたものなどもありました。

これらの意見から、本調査には一部の研究参加者にとっては自己肯定感を高める介入効果もあったと言えるのではないかと思います。

# 研究展開への期待

- 人がゲイになるには、特有の生育歴などがあるように思う。そういうことも聞いてみると面白いのでは？
- 性的指向は遺伝子に由来するものと考えているので、この点の解明に向け研究してほしい。
- 異性愛者の人の同性愛者に対する正直な意見を聞いてみたいので、そういうアンケートを実施してほしいです。
- 一般の人にゲイ・バイセクシュアルをもっと理解してもらえるためのアンケートを実施してほしい。

今回取り上げたテーマ以上に、さらに研究を展開させることへの期待がいくつか寄せられました。今回の研究実施者の所属が医学研究科であったことも関連してか、どうしてゲイになるのか、その要因について調べてほしいという要望があります。自らにとってはごく自然な性のあり方であっても、その成り立ちに対して「先天性なのか後天性なのか」といった疑問を抱き、マイノリティとして生きなくてはならないことの理由付けを求めたくなる心情が表れているようです。

また、異性愛者のゲイ・バイセクシュアル男性への意識や理解度を測る調査実施の要望も寄せられました。これは、彼らが日常的に異性愛者から向けられる視線や言葉に対して敏感にならざるを得ず、しかし、異性愛者にどう思われているかが気掛かりであっても自分では確かめたり調べたりできないジレンマの中にあるが故の要望と思われる。

# 日頃感じていること

## ●ゲイ・バイセクシュアル男性であること

- ・周りにカムアウトはしていないけれど、自分がゲイであることを恥じていないし、自分には肯定的です。
- ・同じゲイの友達もいるし、彼氏もいて、毎日に十分満足している。
- ・一般の人たちよりも物事を広い視点で捉えることができるようになったし、差別される立場の人の気持ちも理解しやすいと思うので、ゲイに生まれてよかった。
- ・自分はゲイだのなんだの、と気にして生きてはいない。
- ・社会のしがらみから離れて、自由に生きられるライフスタイルや環境を作ってから、ストレスから自分を守ることができるようになった。
- ・本当は女性を愛したいし、ゲイであることに後ろめたさを感じる。
- ・世の中ではゲイであることを肯定しようとする運動が盛んだが、自分は違う。男性に性欲を感じるが愛したいのは女性。つまりゲイではなくなりたい。ゲイとして生きることを否定する生き方もあっていいはずだ。
- ・ゲイとして生きることを認める動きが盛んだけど、自分にとってはそれが逆に負担。なぜ声高に自分のセクシュアリティをカムアウトしなければならないのか、理解できない。
- ・少子化が進んでいる世の中で、子孫を残さないゲイへの視線が冷たくなっているように感じられて、辛い。
- ・以前自分がゲイかバイかもしれないと認識したときはショックで悩み抜いた。社会人になってゲイコミュニティに触れ、決して極端なマイノリティでないと知り、これもありなのかな、と思うようになった。
- ・取り立てて幸せでもないけれど、ゲイだからといって不幸せな人生だとも思っていない。
- ・自分がゲイであることを受け入れられたし、周りも受け入れてくれたので今は特に悩んでいないけれど、将来のことを思うと不安になる。
- ・ゲイであることの苦しさは自分で分かっているのに、生まれ変わってもまたゲイになりたいという気持ちもある。
- ・一番心配なのは同性愛的なものが遺伝するかどうかだ。遺伝しないのであれば、努力して家庭を築いていこうと思うものも多いように思う。
- ・ゲイがたくさんいる海外に生活しているので、今はとても自由で幸せだが、日本に帰った時のことを思うと気が重い。
- ・自分は後天的な要素でゲイになったと思う。しかし誘われて引き込まれてしまうと簡単には戻れなかった。
- ・私自身自分から好んで同性を愛したい、欲したいという人間になったわけではなく、先天的なものだと思っている。
- ・どうしてゲイになるのか・・・このメカニズムは多様だろうが科学的に何かが分かれば嬉しい。
- ・もし自分の性的指向がわかる身体的実験があったら参加してみたい。

自分の中の同性愛性を自覚する研究参加者の中でも、その性的指向をどのように受け止めているかについては様々な記述がありました。肯定的に受け止めている人もあれば、罪悪感や違和感を持つ人もいます。苦悩していた過去を経てようやく今は肯定的に考えられるようになったという人がいる一方で、現在の肯定感の良い環境や人間関係に支えられており、それが変わればたちまち損なわれてしまうかもしれない流動的で不確かなもののように感じている人もいます。さらに、自分が愛情や性の対象を同性に求めることの原因を、先天的あるいは後天的なものと思う人、そのどちらとも判らず、答えを求めている人もいます。遺伝するものかどうかを知りたいという記述には、性的指向に関して自分が味わった苦しみを子どもには負わせたくないという気持ちが表れていました。

異性愛が普通で正常とされ、それ以外は異端視されたり病的なもののように扱われかねない社会の中にいることで、ゲイ・バイセクシュアル男性は程度の差はあれ、自分の性的指向について自分の中での収まりどころを見つけるのに時間とエネルギーを要しているものと考えられます。異性愛者の多くが、成長過程で自分の性的指向をことさら「受け入れる」というプロセスを要しない、あるいは理由を問う必要のない自明のこととして、努力や葛藤なしに受け入れられるのとは大きな違いがあります。

同性愛や両性愛を否定するようなメッセージを不快に思うのはもちろんですが、一面的に「悩むことではない、肯定すべきだ」とするメッセージにも、自分の気持ちとのずれを感じる人もいます。教育現場や保健・医療・福祉領域での相談場面でも、性的指向に関連する悩みがテーマとなった時には「個々の感じ方の差異があること」や「受け入れるプロセスも人それぞれのペースがあること」を前提に、相手を個別の存在として理解しようとする姿勢がまず必要でしょう。

## ●差別や偏見のある社会に対して願うこと

- ゲイに対する偏見のない、自分たちにとって住みやすい社会になって欲しい。
- 「ホモ」とか「オカマ」という呼び方には、偏見がこもっている。
- 自分たちはただ同性が好きだけで、何も悪いことはしていないのに、バッシングや中傷をされるのはおかしいと思う。
- 同性愛が、異性愛者には理解できない愛の形だと思われるのは分かるが、同性愛が「おかしい・異常だ・人間のくずだ」と差別される社会にはなって欲しくない。
- ゲイは性的な指向が異なるだけであとは普通の男性です。抵抗無く接してくれることを望みます。
- 同性愛者も異性愛者も、1人の人間としての価値は同じはずだ。
- ゲイを「汚いもの」とか「異常なもの」というふうに捉える異性愛の社会に不満を感じる。
- 世の中には多様な性のあり方があることを、もっと理解してもらいたい。また、同じゲイでも色々な趣味趣向の人がいることを分かってほしい。
- 世の中の人全てに、「同性愛を認めてくれ」と理解を強要する気はないけれど、せめて同性愛者であることを苦に自殺するようなことが起こらない社会になることを願っている。
- 理解してもらいたいとまでは思わないが、せめて無視でもいいから、黙ってみていてほしい。
- 自分たちのことを理解してくれる人が世の中に増えてほしいと願っている。
- 恋人と街を歩くときに、周りの目を気にせずに手をつなげるような社会になってほしい。
- 周囲の女性は「ホモってかっこいい」などと言うが、私が「同性愛者だ」とカミングアウトすることによって、関係が崩れるのではないか、見る目が変わるのではないかとものすごく不安になる。
- 社会的に普通に「存在している」事がわからない人が、いまだ多いと感じる。
- ゲイや同性愛について、もっと日常で正しい知識を一般の人に知ってもらえる場ができれば、今より少しは暮らしやすくなるのではないか。

ゲイ・バイセクシュアル男性について、社会的な理解を求める記述は数多く見られました。揶揄や蔑視、時には異常者扱いするような言葉を見聞きすることは傷つきの体験になり、逆に過度に理想化されたイメージで語られることにも、自分とのズレを感じて不安になることがあるようです。もっと理解してほしい、という声の一方で、理解までは望まないからせめて自分たちの存在を否定せずに黙ってみてほしい、という声もあります。差別や偏見によってこれ以上否定されて傷つきたくない、当たり前前の生活をしている普通の人間として、身近に存在していることをそのまま認めてもらえるような社会であってほしい、という切実な願いが伝わってきます。



## ●ゲイコミュニティ

- 同じゲイの人と出会えたことで、1人だけじゃないんだと思えて、自分を認められるようになった。
- スポーツや文科系のサークルがたくさんあるので、コミュニティの中で充実した生活を送ることができる。
- 東京に出てきたら、ゲイコミュニティに出会ったし、思いのほかゲイの人はたくさんいるんだなと思った。
- セックスの相手だけを求めている人が多いような気がして、うんざりすることがある。
- 昔はよくバーにも顔を出していたが、人間関係の複雑さや他人の噂話に嫌気がさして、行かなくなった。
- ゲイの中には、生育歴が複雑で、今も精神的に不安定な人が多いように思う。
- 社会性に欠けるなど、ゲイの世界には様々な問題を抱えている人がいると感じます。
- ゲイのコミュニティだけでなく、バイセクシュアルのコミュニティも確立してほしい。
- ゲイコミュニティではバイセクシュアルは嫌われる存在なので、たまにゲイコミュニティの中でも自分の居場所がないなと感じることがある。
- コミュニティで出会う人の中には、お金やセックスにルーズな人が少なくないように思う。
- ゲイコミュニティには、閉鎖的で排他的なところがあると思う。
- カウンセリングよりも、ゲイ同士が出会える出会いの場がほしい。発展場やバーでなく、普通に出会える場がほしい。
- ゲイの世界にはセックスをする人数はヘテロより多いのが普通という考えがあり、それを新しく入ってくる若い子に押しつける。だから心理的にできていない子は、性に対する考えが甘くなって行くと思う。
- この世界はまずセックスから入るのでなかなか難しい。
- ゲイはもっと世間で受け入れられるべきだとは思いますが、ゲイ同士での差別などもあり、みんな仲良しこんにちは、とはなかなかいかない。
- ゲイの世界の人間関係に疲れることも多い。もっと信頼しあえて精神的な充足感が得られるような人間関係を築きたいとも思う。
- ゲイを認めない今の社会を嫌だと感じるならば、自分たちゲイもそれを変えられるよう行動を起こしていくべきだと思う。
- 今の日本はまだ同性愛に対する差別が強いというが、実際は同性愛者の方が世間を拒んでわかってもらおうとしていないだけのように感じることもある。
- ゲイが社会的に認められていないことには、自分たちの責任もあると思う。セックスが前提の出会いなど、誤解を招くようなことは自分たちで払拭していくべき。
- インターネットを通じて、若いゲイがかなり自由気ままに何の警戒心もなく交際しているようなので、別の意味でゲイが非難されるのではないか。もっと節度を持って行動してほしい。

ゲイコミュニティに参加して、同じ性的指向の人に出会ったり、性的指向を隠さずにいられる仲間とサークルを作ったりすることで、孤立感から解放され自分の存在を肯定できるようになった、という記述がありました。ゲイコミュニティがあること、また実際にそこに参加することで、救われ、支えられているゲイ・バイセクシュアル男性は少なくないと思われます。

その反面、ゲイコミュニティの中で体験することへの違和感や懸念の記述も見られました。例えばコミュニティ内部にもある差別や排他性、性行動を煽るような集団規範、セックス優位で長続きしない人間関係の繰り返し、無責任な人間関係の在り方などです。そうしたことによって精神的な充足感や安心が得られない疲労感を持つ人もいます。ゲイコミュニティの外でも中でも、安心できる人間関係が得られない、居場所がないと感じることは、とても寂しく不安なことではないかと思います。「ゲイ同士が普通に出会える場がほしい」という意見には、もっと違う出会い方、関係の作り方を求める気持ちが窺えます。

一方、社会的な理解や存在認知を求めるならば、自分たちから外に働きかけ歩み寄る、あるいは内部にある問題点を自分たちでよりよく変えていこうとする姿勢も必要なのではないか、との意見もありました。ゲイ・バイセクシュアル男性へのHIV予防介入や支援を考える上で、このような自己変革への意欲や動機づけも、コミュニティに内在する力として十分に尊重すべきものと思われました。

## ●ゲイ・バイセクシュアル男性として生きること

- 同性愛者であることを隠さなければならない状況の中で、自分なんていなくてもいいと思うことはよくある。こんな自分はこれからどうやって生きていくのか不安だ。
- 自分の存在意義が見出せない状況が無気力な生活を生み出すことに関連性を考えられるのではないか。
- 今の日本は海外に比べて同性愛についてあまりにも無関心というか否定的な考えが多くて、自分がまるで犯罪者のような気さえ持ってしまう日々です。
- もっと同性愛への理解者が増えて、仕事場でも胸を張って自分の意志表現・存在証明ができるようになるといいなあと思う。
- 好きな人に好きだと胸を張って言い、その人とデートをし、皆に祝福されたい。本当にそれだけでいい。でも、それがなかったら人は何のために生きているのか。
- 同性愛者として異性愛社会に生きなければならないことは、毎日自分自身がダメな、欠落した人間なのだ、と思わされて暮らすことに他ならない。そのストレスの苦しさは想像を遙かに超えたものです。
- 日本はゲイの人が仮面をかぶって生活しなければならない。自己否定を続けていると、生きることができなくなりそうです。
- 同性愛者としての自分と異性愛者としてふるまう自分とにものすごく隔たりを感じるとともに、そのことがストレスになっている。
- 自分がゲイであることを隠すのは正直言って辛い。嘘をついて生きていくことになるから。

ゲイ・バイセクシュアル男性が社会的に否定されていると感じることで、自分の存在意義に対して懐疑的になり、生きる意欲や希望すら持ちにくくなっている研究参加者もいました。性的指向は「自分とは何か」というアイデンティティを構成する重要な要素です。それをひた隠しにして社会生活を送っていることで、自分を偽っている、あるいは二重の自己を生活しているような感覚がもたらされ、辛さや罪悪感、ストレスとして感じられていることが窺えます。ここには、自分が直接的に差別や偏見の対象となるような出来事に出会わなくても、自己否定感を抱え続けたり、ありのままに生きられない日常が続くことが、「生きることができなくなりそう」なほどの重大なストレスになり得ることが示唆されています。

## ●若い世代への懸念

- ・ゲイの世界は20代～30代前半の若者が主流と思うが性感染症についての啓蒙が追い付いていない。病気やメンタルのことも経験のある中年層の存在が必要と思うが、若者だけの世界が固まることで年齢層の壁ができてしまうため、難しいだろう。
- ・一人で悩んでいる若い同性愛者も多いはず。昔の自分がそうだったから。
- ・特に若い人にとって住みよい社会にしていきたい。私を感じ取ってきた思いと同じ精神的な苦痛からの解放を保証してあげたい。
- ・出会い系サイトで中高生の投稿を見かけると複雑な心境だ。自分が悩んでいた分、彼らが羨ましい一方で、決してキレイではないこの世界に早くから染まってしまうのは彼らのためになるのか・・・。
- ・孤独感を募らせている若年の同性愛者が将来への不安感や孤独感から自暴自棄な行動に走る場合も少なくない。例えば、体を売る、ホモビデオに出演するというのは個人の自由だが、それを若い時に自暴自棄でしてしまうことはおそらくリスクが高すぎるし、これからの若い同性愛者たちのためにも何らかの政治的な手段を講じて防ぐ努力をすべきである。

## ●インターネット

- ・インターネットが発達したことで、より一層ゲイコミュニティの大きさを感じられるようになったし、色んな人と知り合えるようになったのは楽しいし、役に立っていると思う。
- ・インターネットによって同じゲイの人と話したり、会ってつきあったりできるようになり、日常的にも精神的にも楽になった。
- ・田舎に住んでいると、なおさら恋愛の相手やゲイの友達との出会いの機会が少なくなってしまうので、インターネットの存在はとても大きい。
- ・共通の価値観の友人やゲイの友人が見つかりにくい環境に住んでいるので、ネットを通じて「隠れゲイ」の人たちがもっと積極的に行動できるチャンスが増えたらいい。
- ・HIVの問題は深刻だと思う。インターネットが普及し、不特定の相手に出会いやすくなったのが大きく影響している。
- ・インターネットは個人が自分に必要な情報を自分の判断で取り出して活用できる反面、判断力の十分でない個人にも同時に配信されているのは恐ろしい。
- ・ネットだけに出会いを求める人は、直接人と会って知り合うことを考えずに、セックスだけの相手を求めている人が多いようだ。

より上の年代の研究参加者から、若い世代の心身の健康を真剣に心配し、何か力になりたいという気持ちが示されています。自らが経てきた苦悩を若い世代には味合わせたくないという願い、あるいは自分たちの頃にはなかったリスクに現在の若い世代がさらされていることを懸念しつつも、具体的にはどうしたらいいかわからないと思っているようです。また無防備なままコミュニティに飛び込むことで、その影や闇の部分を知ってしまい、若い世代の心がすさんでしまわないかという心配もあるようです。

これまでHIVや他の性感染症の予防介入では、数々のコミュニティベースの試みが実践されています。性的指向を同じくする者同士で、ニーズに則した具体的な情報提供や助言を提供できる点や、行動面でのモデルを示せる点がメリットと考えられるからでしょう。しかし具体的な知識や情報ばかりでなく、上記に見られるような、コミュニティに潜在している連帯感や愛他的な精神そのものが何らかの形で表現され、伝わる機会や場を作り出すことが、予防介入をより有効にする基盤作りとして重要と考えられます。上の世代から性的な対象として関心を持たれるばかりでなく、人間として心配されたり大事にされたりしていると感ずることができれば、若い世代が自尊心やコミュニティへの信頼感を育てていく一助となるのではないのでしょうか。

インターネットは、ゲイ・バイセクシュアル男性が仲間と出会い、活動や交流の場を獲得して社会的孤立から解放されることを可能にしました。しかしその一方で、インターネットの普及が、性的な出会いを容易にし、性衝動を駆り立て、性的な刺激や快感への没入傾向を強めている可能性も自由記述の中で指摘されています。これはゲイ・バイセクシュアル男性に限らず、社会全般に認められる傾向ではありますが、日常生活において出会いの手段や機会が限られているゲイ・バイセクシュアル男性にとっては、出会いのきっかけをインターネットに頼る人の割合はより大きいかもしれません。彼らはインターネットの恩恵を受けると同時に、多種多様なリスクにもさらされていると言えるでしょう。

インターネットは、その利便性（距離を問わずに人とのつながりが生まれること、匿名性が保たれやすいこと、情報が得やすいことなど）をうまく活用することで、コミュニティへの帰属意識の低い人やコミュニティを避けている人、あるいはコミュニティベースのメッセージが届きにくい地方在住の人などに対する予防介入の重要なツールになる可能性を秘めています。また、今回の調査から、必ずしも同じ性的指向ではないかもしれない研究実施者と研究参加者との間にも、インターネットを通じてコミュニケーションできる関係や協力体制を生み出すことができるのではないかと、思われました。

## ●教育に願うこと

- ・小、中、高校の性教育で同性愛についてきちんと扱うべきだと思う。それが孤独感を感じている若いゲイの救いになるかもしれない。
- ・男の子と女の子が恋愛をするのが当たり前、という教育のあり方では、いつまでたっても一般の人からはゲイは宇宙人のような存在のままだと思う。
- ・学校に通う時期と思春期とは重なる部分が多い。自分が性的指向を自覚した時に周囲はヘテロの人間で溢れており、その環境で生み出された疎外感に今でも苛まれている。
- ・人生初期の学校教育から性の多様性を教えることで、マイノリティにとっては社会の抑圧を軽減することになり、より良い人生を進む糸口として機能するだろう。
- ・同性に惹かれる存在もあること、そういう指向の人でも人間的価値は同じであることを初中等教育を通じて広めてほしい。
- ・教育の場で、同性愛者と異性愛者の学生が自由に交流できるようになってほしいと思う。
- ・同性愛に悩みかつて学校で匿名の相談をしたが苦い体験となった。現在の学校の性教育で同性愛についてカリキュラムに入っていることを願う。

## ●将来への不安と法的整備への願い

- ・自分の生きやすい環境を努力して作ってきたが、老後についてはかなり不安。特に病院に入院した時のことを考えると寒気がする。
  - ・将来老いていって一人で暮らすのは寂しいことだと思う。
  - ・同性を愛することに長い間苦しんで来て、ようやくある男性と出会ったが、自分がこれからどうなるのか？どうすればよいのか？いまだ将来が不安。
  - ・将来を真剣に考えるのはストレスです。一人で野垂れ死ぬ自分の姿が目には浮かびますから。
  - ・同性同士でも結婚できるようにして欲しいし、それが変に思われずに周囲から認められるような社会になってほしい。
  - ・お付き合いしても同性だと「どうせずっと一緒にいれるわけじゃない」と遊ぶ人が多い。だから同性婚を認める国を羨ましく思う。
  - ・良いパートナーがいるが、老後、自分が死ぬ時の財産分与や面会権を考えると、同性婚・DP法\*だけは確立してほしい。
  - ・社会制度（保険や年金、婚姻など）上でゲイであることにより不利益を被らないで普通に生活したいというゲイの潜在人口は多いと思う。
  - ・同性愛者が何年つきあっても制度的に何も守られていない。即ち、国から何も期待されていないということ。社会から期待されていない私達は何を活力源として生きて行けば良いのか？
- \* DP法：ドメスティック・パートナー法。一定期間同居する同性愛のカップルに年金や財産相続の権利を認める法律。

ここには、同性愛や両性愛に対する社会的な理解の促進を学校教育の早い段階から組み入れてほしいという願いと、それだけでなく同性に向かう欲求や関心を自覚し始めた児童や生徒自身のためにも、学校で性の多様性を認める教育があることの大切さが述べられています。学校という社会の中で、自分が持っているかもしれない性的指向を否定や揶揄、嫌悪を受けるものとして認識し始めるのと、多様な在り方のうちのひとつであり人間としての価値差を意味しないこととして認識し始めるのとでは、その後の人生の方向性が大きく異なって来るものと考えられます。同性愛や両性愛への否定的なメッセージを強く受けるほど、疎外感や不安を感じ、しかもそう感じていることすらも隠さなければいけない（つまり感じていない振りをする）という二重のストレスに同時にさらされることになるでしょう。

性にまつわる教育カリキュラムの見直しや改善も求められますが、それ以前に、教育現場にいる大人が、性的指向について周囲との違いに疎外感を持ったり、自分自身でも違和感を持つなどして密かに悩む生徒や児童が今現在身近にもいるのかもしれない、という想像力を持つ必要があるでしょう。そして自分たちの日頃の何気ない言動の中に、異性愛以外の性的指向を否定するようなメッセージが含まれていないか、またそのことがどれほどの影響を与えうるのかについて振り返ってみることが望まれます。養護教諭や性教育担当者はもちろん、性教育に直接携わることのない教師であっても、性的指向に関する悩みや葛藤を相談できる窓口となる人が身近にいることも、とても重要なことと思われま

男性同士のパートナーシップが法的に守られていないことに関連して、将来の孤独への不安を感じている研究参加者がいました。異性愛者の結婚においては、法的な守りや縛り、周囲からの期待や社会規範、あるいは子どもの存在によって、相手との関係を維持しようとする動機づけが多少なりとも支えられています。しかし、同性のカップルは多くの場合、そのいずれの支えも欠いています。愛情対象となる同性を見つけても、男性同士のカップルへの理解があまり得られない社会の中で、互いの思いや信頼だけを頼りに関係を長く続けていくことは、決して楽ではないと思われま

また、自由記述からは「一緒にいたい相手でもどうせずっと一緒にはいられない」という諦めや割り切りによって、性的な関係は持っても、その関係を心理的に深めることは最初から避ける場合もあることが窺えました。それは、一般的には「性欲を満たすだけの」「無責任な」関係の持ち方と見なされるかもしれませんが、確かな関係を求めても得られない時の落胆や悲しさを感じなくてすむための、やむなき身の守り方とも考えられます。

男性同士のカップルの関係が法的にきちんと保証されていないことは、実際のカップルが被る現実的な不利益だけでなく、ゲイ・バイセクシュアル男性の将来への希望や、「将来につながる今」をよりよく生きようとする意欲を持ちにくくする、などの眼に見えない心理的な影響を及ぼしている可能性があると思われま



## ● HIV や性感染症の予防

- HIV の検査を受けたいけど、地域の保健所では時間的に不便なので検査が受けにくい。
- HIV の自己検査法がもっと利用しやすくなればいいのではないか。
- ゲイにとって、予防についての情報を得られやすい環境を作る必要があると思う。
- ゲイであることを明らかにしても大丈夫な、予防の方法について相談できたり性感染症の治療が受けられる医療機関が必要だと思う。
- セックスを規制したり純愛を推奨するのではなく、定期的に HIV や性感染症の検査を気軽に受けられ、カウンセリングにつなげられるような体制作りが必要だ。
- HIV については、「ゲイの病気」とか、「ゲイの撲滅が予防」というようなことを言う人がいて、不愉快だ。
- 異性愛者にも起こる病気なので、HIV について色々な媒体を使って各々にまずは実情を知ってもらう努力をすべきだ。
- HIV の検査を受けたほうがいいのかもしれないが、やはり怖い。
- 自分ももしかしたら HIV に感染しているのではないかと不安になることがある。
- もっと多くのゲイが、正確な知識を持って積極的に予防する努力をしてほしい。
- コンドーム使うのが当たり前という風潮になってほしい。
- 本当はセーフセックスがしたくても、なかなか「コンドームを使おう」と言い出せないままセックスが始まってしまうことが多い。
- オーラルセックスではコンドームを使わないのが今は主流だが、オーラルセックスについてもコンドームを使うよう啓発してほしい。
- 感染リスクはゼロでないとわかっていても、フェラチオでコンドームを使うのはちょっと興ざめしてしまうというのが本音だ。
- 彼としかセックスをしないので、コンドームを使わずに、できるだけ性感染症のリスクを低くするにはどうすればいいのかについての情報がほしい。
- 男性同士のセックスは、そういう場所に行けば相手を探すのが結構簡単なので、その性欲を抑えてセックスを控えるような感染予防は難しいと思う。
- 早く HIV の特効薬が開発されたらいいと思うけれど、それが開発されたらみんなもっとセックス三昧になるんだろうなと思うと、怖い気がする。
- 自分は HIV 陽性者だが、周りの友達に HIV のことをカムアウトした上で予防を呼びかけても、あまり聞く耳を持ってくれない。
- 知らずに HIV 感染者とのセックスをしたが運良く感染しなかった。それからは本当に気をつけようとしている。
- AIDS を減らしたいのなら発展場やハッテンという行為に対して社会的制裁を加えるべきだ。
- 自分はセックスの時必ずコンドームをつけるようにしているが、今まで相手の方から「つけよう」と言われたことはなく、コンドームを持っていた男性に出会ったこともない。
- 多くのゲイの実際の行動は HIV 予防を優先させたものにはなっていない。
- 自分は皆に HIV の感染の恐ろしさを話して退かれる。
- ネット上では、予防に対して意識の低い人が結構目立ちます。
- HIV について私達若い世代にはあまり危機感がないように思う。友人のセックスについて病気は大丈夫かと心配したら「脅そうとしてるのか」と軽くあしらわれたことがあり、意識のギャップにショックを受けた。
- AIDS 啓発に関わっている友人も、ポジティブの友人もいるが、頭では分かっている自分には関係ない、という感じが拭えない。

本調査のテーマのひとつであるHIV 予防に関連して、様々な具体的な提案や要望、感想などが寄せられました。まず、「HIV＝ゲイの病気」と誤解されることへの反発がありました。しかしもちろん自分たちにも関連する病気として認識し、性的指向を明らかにしても安全な、また性的指向に則した具体的な情報を得られる、検査・相談・治療環境の整備を求める声が多数寄せられました。その一方で、①セーフアセックスを実践しようとしても、相手の非協力や周囲の認識の乏しさ、意識の相違などから実践しにくいこと、②現実身近にHIV 感染した人がいてもなお、自分にも関わりのあることだと実感できない場合もあること、③予防を二次にした性行動をとる周囲の人々に対して懸念、不安、怒りを感じている人もいることなどから、ゲイ・バイセクシュアル男性の中でもHIV 予防への意識やスタンスの差がかなりあるものと思われます。危機意識や予防への動機づけを持つ人が、それをセックスの相手や友人に伝えようとしてもなかなか容易ではなく、逆に孤立してしまう可能性すらあるようです。

ゲイ・バイセクシュアル男性への予防介入においては、当事者だからこそ果たせる役割が多々あり、当事者団体やグループがそれを活かした活動をしています。しかし保健・医療・福祉などの分野における当事者性のない専門職が関わることには、当事者同士のピアプレッシャーやコミュニティ内の性規範に影響を受けずに、中立的な立場からの介入や支援ができるという利点があります。「直接的介入はコミュニティに一任すれば良い」としてしまふのではなく、非当事者だからこそ可能な直接介入の方法をも検討・開発していく必要があるのではないのでしょうか。

## ●心理・社会的要因と性行動

- ・恋人がいても、世間での「異性愛的な会話」に押しつぶされそうになる時、時々誰とでもかまわな  
いからセックスしたくなる時はある。
- ・ゲイの社会ではさまざまなストレス要因があることで、つきあっても性欲に走ったり、性病の  
知識があるなしにかかわらず感染する恐れのあるセックスをする人が多かたりするから、必然的  
に性病の感染者が多くなるのだと思う。
- ・ゲイの場合は、ほかに行き場がないからハッテン場で性欲を解消することになるので、病気が流行  
りやすいのだと思う。
- ・ゲイであることのストレスを解消するために、多くの人とのセックスに走ったり、予防の知識があ  
っても感染する可能性のあるセックスを求める人がいるのではないかと思う。
- ・男女間よりも同性間で HIV 感染が広がっているのは、男女のように結婚が認められていないために、  
付き合うことに社会的な責任が伴いにくいからではないか。
- ・日常何らかのストレスを抱えながら、「ここが自分たちの生きる場だ」と勘違いし、ゲイの世界で  
しか生きがいを感じられなかったりセックスが過剰になり歯止めがきかないほどになって病気も怖  
がらなくなってしまう予防も何もなくなってしまうのだと思う。
- ・現代社会ではゲイの存在の認知が低すぎ、悩んでいる人が駆け込める場が見つけれられない。誰にも  
言えない悩みを発散するように発展場に流れるのです。
- ・もっと自分の性的傾向を気軽に話せる社会になってほしい。そうすれば、性感染症予防についても、  
もっと気軽に話し合えるのではないか。
- ・オーラルセックスにもコンドームを使えということは、そのような行為をするなど言っているに等  
しく、アイデンティティを否定されているように感じて実行できない。生活のあらゆる場面で自分  
を殺して生きている、抑圧されていると感じることが多く、唯一そのようなところでしか自分を解  
放させることができず、感染の危険に目を伏せてもそう行動してしまう。同性愛者がもっとのびの  
び暮らせる社会になれば、感染症への気遣いもできる余裕が生まれると思う。

これらの記述は、ゲイ・バイセクシュアル男性が置かれた社会的状況や、その中にあっての心理的状況が性行動へ駆り立てる要因になっていることを、「自分」や「自分たちゲイやバイセクシュアル」の体験や内面の洞察を通して述べたものです。他の項目の記述内容からも窺い知ることができますが、異性愛社会の中でゲイ・バイセクシュアル男性として生きることの絶え間ないストレス、居場所のなさ、「押しつぶされ」「自分を殺す」感覚と、その反動のようにゲイの世界での「発散、解消、解放」のためのセックスに「走り、流れ、歯止めがきかなくなる」現象があることを、彼らは伝えようとしています。おそらくそのような時は、自分や相手の健康を守るうとする気遣いは失われ、「どうなってもいい」というような気持ちで、耐えていた感情を解き放つための、あるいは寂しさや空虚感を埋めるためのセックスになっているのではないのでしょうか。HIV感染の可能性を知り、コンドームの予防効果を知り、コンドームがすぐ側にあったとしても、「使う」という行動を取るところまで自分をコントロールできない瞬間があることが、これらの記述から推察できます。

環境から受ける否定的なプレッシャーが大きければ大きいほど、またそれに対処する自我の力が育っていなかったり、とても弱っている状態であればあるほど、たとえそれが健康を害する可能性を伴うものであっても何かの行動によって内面のモヤモヤを晴らそうとする機制が人間にはあります。上記の研究参加者らのように自分の内面の状態と、表に現れる行動のつながりに関して気がついて、かつ言語化できる人ばかりではないでしょう。自分が受けているストレスの強さや、自分が抑えこんでいる感情に気づかずに、やみくもにセックスに駆り立てられている人たちもいるのではないのでしょうか。